



—東地中海地域ニュース—

中東和平：ネタニヤフ首相の米議会での演説に関するイスラエル各紙論調  
(25日付現地各紙)

24日に米議会で行われたネタニヤフ首相の演説に関する論調は、以下の通り。

1. 「ビック・イベント」イエディオット・アハロノット紙 [ナホム・バルネア記者 (首相同行)]
  - (1) ネタニヤフ首相にとっては、1967年境界までの撤退、ハマースが参加するパレスチナ政府との交渉、およびパレスチナ難民のイスラエル領土への帰還の全てを一貫して退けたことは、今回の訪米で得た成果といえるかも知れない。しかし、イスラエル国民はオバマ大統領を信頼しておらず、アラブ諸国は同大統領のイスラエルよりの姿勢を非難するなど、大きな課題を残している。また、パレスチナ自治政府およびアラブ諸国は、9月の国連決議に向けた姿勢をより強固にするであろうし、イスラエルにとってその後のシナリオは、かなり危険なものとなるであろう。さらに、訪米前にわずかに残されていた交渉再開の可能性は、今回の訪問を通じて皆無になってしまった。
  - (2) ラビン元首相およびオルメルト前首相も米議会での演説したが、ネタニヤフ首相ほどの歓迎を受けたイスラエル首相はいなかった。しかし、今回の演説で、ネタニヤフ首相がアカデミー賞を獲得できたとしても、ノーベル平和賞の受賞には至らないであろう。
2. 「ネタニヤフ首相のアリバイ」ハアレツ紙 (ヨッスイ・ヴェルテル記者)
  - (1) 24日、米議会での演説において、ネタニヤフ首相は、イスラエルのスポークスマンとしての能力を最大限発揮した。同首相は、勝者としてイスラエルに帰国するであろう。「演説の戦い」において、同首相は敗北しなかった。
  - (2) ネタニヤフ首相は、演説において、1967年以降の変更や入植地を反映した上でのパレスチナ国家建設に対するコミットを繰り返した。長期的に考えれば、これは右派や入植者にとって悪い知らせである。しかし、誰も長期的なことは考えていない。ネタニヤフ現政権の任期中、和平がもたらされることがないことは明らかである。
  - (3) ネタニヤフ首相の議会での演説は、次期選挙における同首相の政治的綱領になるであろう。同首相の考える選挙対策は、和平推進への意志とパレスチナ国家建国への同意によってカディマ党などの左派を抑え、安全保障問題や、ユダヤ国家としてのイスラエルの承認、ハマースの拒絶によってイスラエル・ベイテイヌ党などの右派を抑えるというものである。

(4) ネタニヤフ首相は 9 月に向けたアリバイづくりに熱心のようにである。仮にパレスチナ国家が宣言され、国連において承認され、西岸やイスラエル国内各地で衝突が生じた場合、同首相は「自分（ネタニヤフ首相）は非難される覚えはない。自分（ネタニヤフ首相）は、米議会および全世界に対して、和平推進への意志を示し、譲歩する用意があった。そして、これが、パレスチナおよびアラブ側からの反応である」と述べるのであろう。

3. 「ネタニヤフ首相は機会を逸した」ハアレッツ紙（アリ・シャビット論説委員）

(1) ネタニヤフ首相は、聡明であり、教養があり、物事を明瞭に述べる人物であるが、寛大ではない。同首相は自己中心的であり、他者の立場に立って世界を見ることができない。そして 24 日の演説において、世界中がそれを目撃した。同首相は外交的な突破口を開くことができなかった。パレスチナ、欧州諸国、オバマ米大統領に対して寛大になるにはどのようにすればよいか分からず、同首相はその機会を逃してしまった。

(2) 同首相は、演説においてパレスチナ側に 4 つの姿勢を示した。1 つ目は、将来的なパレスチナ国家と土地を分かち合うこと、2 つ目は、我々の祖先伝来の土地からの部分的離別を含む幅広い譲歩へのコミットメント、3 つ目は、イスラエル領土の外に入植地が残されることになること、4 つ目は、将来的なパレスチナ国家との境界線は 1967 年ラインとはならないが、境界線に関し、イスラエルは寛大な姿勢で臨むという内容であった。

(3) しかし、同首相は「寛大」ではなかった。外交的な「津波」がイスラエルに押し寄せようとしている中、同首相は「迫り来る波」から我々を守るために十分な発言を行わなかった。同首相はイスラエルの将来を保証するために必要なことを言わなかった。

---

◎本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799